

---

# VRMMOFPSで、チートハーレム物。（題名未定）

診見 観身

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

VRMMORPGで、チートハーレム物。（題名未定）

### 【Zコード】

Z3966Y

### 【作者名】

診見 観身

### 【あらすじ】

VRMMORPGにログインしようとしたのだが……なぜかVR MMOFPSの世界にいた。

しかも、そこでログアウトできず。

二つの陣営に分かれて死をかけたサバイバルゲームが始まった。

巻き込まれたのだが、その時に一人の女のプレイヤーに会つたことから、

協力することになり動き出す物語。

生き残るために様々なことをして、増えていく仲間たちと思つたら

女の子ばかり。なぜか勝手にハーレム状態になる主人公。

RPGの能力をそのまま引き継いだ主人公がチートな感じです。チートでハーレムが苦手な方は遠慮してください。

体の一部が欠損する表現などが出てくるので苦手な方は遠慮してください。チートハーレム▼RMMO物です。

## プロローグ

二十一世紀が過ぎて数十年たつた日本。

そこでは、VRMMOが世の中に出回っている。

最寄りの接続場所に行けばすぐに入れるゲーム世界として有名だった。

普及してこるかのように思われているがそこには影の部分があった。  
ここに、VRMMORPGにログインしようとした一人の男の姿がある。

高校に通っている美濃 雅一は、今日もいつも通りにRPGの世界に入つて行くつもりだったのだが・・・・・

「さて、ログインしようと

雅一は、VRMMORPGに入ったつもりだった。

「……なんじゃこりはーー

雅一が最初に現れた光景は、崩壊したビル崩れかけの家などの「」へ

ありふれない風景だった。

「あれ……俺、来る場所間違えたのかな？」

辺りを見渡してみるとそんな光景が続いている。  
しかし、雅一は、自分の格好を見てみるといつもRPGで使っている装備だった。

「これどう見ても……俺が使っている剣だよな……新しいステージでもリニューアルされたのかな……でも、中世ファンタジーの世界では、これはいくらなんでも運営側がおかしいよな……」

雅一は、いつも縁あふれる森の中などでゲームをしていたはずだった。

モンスターを倒したりクエストをクリアしたりしていたはずだった。

雅一にとつたらこの光景は異常だ。

「しかたない、ログアウトしてみるか」

ログアウトするため、MCDを取り出す。

MCD……正式名所でメイユーノンソールドライバというVRMMOでは、誰もが持っている物だ。

それを使って道具やお金を確認したり、ログアウトしたりする装置だ。

「あれ……できない……こわれたのか。いやここに壊れ何ていう概念

はないはずだからありえないな」

MCDのログアウトボタンを何回も押すがログアウトできなかつた。壊れているということも考えたのだが、あくまでここはヴァーチャルであつて壊れるということはありえないのだ。

「何なんだよ！？」

一人で叫んでいた時に、RPGでは絶対に聞こえない銃撃の音が聞こえた。

『バン、ダン、ドドドッ！』

「何だ！？何だ！？」

雅一は、銃撃の音を不思議に思つて近づいてみると、一人の女の人が、4人の軍服を着た人たちと銃撃戦をしていた。

その女の人は、160？ぐらいで胸が大きく、白いのタンクトップを着て、下はオレンジ色っぽい茶色のズボンをはいている。そして、オレンジ色の髪の毛を後ろでまとめている。たぶん、高校生ぐらいだろうと雅一は思った。

そんな女の人があの形からAK-47らしき武器で応戦しているのを雅一は見た。

何が起きているのかわからなかつたのだが、とりあえず助けることにした。

「いくらなんでも、一人で四人と戦うのはきついだろう。」

そうして、雅一は走った。

たとえ銃を持った相手でも四人ぐらいならどうにかなるだろうと思つた。

「ほら、こっちだ！！」

雅一は、一人目の軍服の奴に横から奇襲をした。

「一人目！！」

軍服の奴は、一人倒れたが、3人ともこちらに気付いて銃を撃とうとしたのだが。

「スキル、迅雷」

雅一は、瞬間に一人の軍服の奴の懐に入り。

剣で切る。

雅一が使つたスキル“迅雷”は、素早さを高くすると使えるスキルで相手の目を錯覚状態にさせる事が出来る。

敵は、ずっとそこにいるかの様子に見せかけて実際は、動いているという、目の錯覚を使ったスキルだ。

慌てている、他の奴にも切りかかり

「最後に、終わり！！」

最後の奴にも切りかかった。

雅一は、四人の銃を持った敵を倒してしまった。

「意外に楽勝だつたな…」

倒した後、戦っていた女の人気がいた方を見たときに

「いない…？」

『力チヤ』

そして、後頭部に銃を向けられた感覚があつた。

「あなたは、何者？」

そう、冷たい声で訊かれたのだ。

## 1 下ろされた銃 衝撃の事実

「あなたは、何者？」

雅一は、動けないでいた。

たとえ、当たつても死ぬわけではないのだが。  
VRMMOは、実際に少しの痛みを感じる。

痛覚に、電気信号を送つて擬似的にダメージを与えるのだ。  
RPGや、他のジャンルは低めで設定されているが。  
FPSは若干高い。

頭に撃たれるということは結構痛い。

そう思つてゐる雅一は、動けないでじつとしていた。

やがて、相手が話しかけてきた。

「もう一度聞くけど、あなたは誰？ 所属を言ひなさい。」

「俺は、ただの通りすがりの英雄で……」

『トン』

銃を頭につけられた雅一はビビる。

「最後のチャンスをあげるは、あなたの名前を教えなさい。」

最後のという部分に過剰に反応した雅一はあきらめて、

「俺の名前はミノマサだ。本当はRPGにログインしたはずがこん

などこにいてたまたま襲われているあなたを助けただけだ！」

早口で一気にしゃべった。

「ミノマサと言ひのば、ゲーム内での名前で、ただ名字と名前最初を合わせただけの普通の名前だと雅一は自負しながら言った。

「ミノマサ……聞いたことない名前ね。あなたぐらこの強さなら有名になつていてもおかしくないのに、しかもファンタジー凶なのに…」

ファンタジー凶といつのは、FPSの世界でいかにもRPG的な服を着てナイフなどを武器にして戦う奴らの事だ。

RPGの中にも、ミリタリー凶がいて、迷彩服や銃っぽい武器を持っている。

「だから、言つてこるだろ！RPGにログインしようとしたけど何かここにこりつて…」

未だに銃を頭から話してもらえていない状況から必死に説得する雅一。

「なら、RPGのゲームの名前と今の陥つている状況のを知らないのね？」

ちょっと緊張が和らいだ声で言つたために安心しつつ雅一は言った。

「ああ、もちろんだ。たぶんお前たちの敵にもならないだつて、攻撃もしない！」

「まあいいわ。“でも”、手は上にあげたまま！』

銃は、頭から外されたが、彼女の言つたとを聞くことにした雅一は手を挙げたまま振り返った。

「やあ。」

たしかに、先ほどまで戦っていた女の人がそこにいた。しかし、彼女は銃をこちらに向けたままだった。

「あの～銃を下ろしてもらえませんか……？」

弱弱しく下から田線な感じで雅一は尋ねる。

「まだ、私はあなたの事を信用していない。さあ、ＭＣＤを見せなさい。」

「あの～手が使えないと出せないんですけど……」

雅一は手を挙げたままで腰にあるＭＣＤをとれないでいる。

「わかったわ。まったくめんどくさい男ね。」

そう言って、雅一に近づき腰にあるＭＣＤを奪う。

「乱暴だな」

彼女は雅一の言葉も無視し、銃をこちらに向けながらＭＣＤを触っている。

「器用だ……」

数分もしたら、雅一の方に向いた。

「本当の事みたいね。まずは、あそこの建物の中に行きましょ。…  
…いい人材をゲットしかも」

彼女が指をさした建物の中に行こうと歩き出す。

しかし、雅一は最後の言葉をつまく聞き取れなかつたのだ。

「やつとわかつてくれた…」

「早くいきなさい。」

「は、はい！」

雅一はやや馴れ足氣味に建物の中に入つて行つた。

3階建ての中の一階部分にそつとうする所に一人とも入つて行つた。  
まともな原型をどじめておらずボロボロの建物の中で、彼女は銃を  
下ろした。

「血口紹介まだだつたね。私の名前はカノン。『月下の灯』という  
クラシックのリーダーをしている。」

銃を下ろして、出で歯でいるコンクリートの上に腰を掛けたため、

雅一もそうする。

「カノンな、よろしく。それで、今の状況を教えてくれないか?」

そして、彼女の口から衝撃的な事実を聞く羽目になる。

「IJJは、VRMMOFPS、ガン・カウンター・テロと言うゲーム。そして今、命を懸けた“サバイバルゲーム”をやっている。」

## 1 下されたる銃 衝撃の事実（後書き）

評価、感想など待っています。

## 2 事実の説明 GCT 説明

「 IJU は、 VRMMOFPs 、 ガン・カウンター・テロ と言つぐ  
ム。 そして今、 命を懸けたサバイバルゲームをやつて いる。 」

「 …… はつ ! 命を懸けたサバイバルゲーム ? 」

カノンは、 雅一 に事実のみを伝える。

「 ガン・カウンター・テロ つて。 最近話題の F P S か ! 」

雅一 は、 ガン・カウンター・テロ 。

GCT の存在を思い出す。

VRMMOFPs の中でもかなりのリアルティを追求して、 乗り物  
とかに乗れる、 とかそういう宣伝をしていてたことを思い出した。

「 そう … たぶんあなたが思つて いるのであつて いるはず。 それで、  
ガン・カウンター・テロ やつたことある ? 」

「 いや、 宣伝で知つただけで、 やつたことがないそもそも F P S 自  
体、 2 ~ 3 年前にちょっとやつてただけだから 」

雅一 は、 IJU 1 ~ 2 年ずつと RPG をして いる。

そしたら RPG の方がやばいレベルになつたのだ。

「 なら、 簡単に説明するわね。 ガン・カウンター・テロ は、 日本を  
舞台の F P S 。 年は、 201X 年の設定でまだ冷戦が続いて いる。  
そして、 私たちプレイヤー は正規軍か、 解放軍かを選べる。 それぞ  
れバックに大国がいて、 正規軍にはソ連。 解放軍にはアメリカがつ

いている。このゲームの面白さは、なんといつても乗り物に乗れることと水の中に入れたり、パラシューートで降下できるのよ！すごいと思わない！？それぞれ、バツクの国からの任務をこなしてレベルを上げたりするの。」

「ああ……」

簡単に説明するところがすぐつい長く説明されて啞然としている雅一に追い打ちをかける。

「それで今の状況は。今日は1周年記念と言つことで何やらイベントがあると告知されていたの。それで、みんなログインしてきたりいつもと違う場所にいて。そしてたら急に変な人が現れたの！この世界の神だという人が。そしてその人が正規軍と解放軍、それぞれ1万人に分かれてサバイバルゲームを開始します。この世界では、ゲームオーバーになつたら、”死”を意味します。それでは、頑張つてくださいねって言つてきたんだよ！」

「ああ……」

カノンは雅一にさらなる機銃掃射並みの口撃を開始する。

「それでそれで、いざゲームの中に入ったと思つたら、クランメンバーの子たちと別れちゃうし、それで、あ～どうしようと思つてたら、NPCの奴らに襲われて君に助けられたつていうわけ。理解できた！？」

「ああ、もう完璧だ。」

雅一は、これ以上聞きたくなかったためにまだ聞きたいことはあつ

たのだがやめておいた。

「うう… それで状況の確認はできた！？」

「ああ、サバイバルゲームが始まつてゲームオーバーになると死ぬつて……死ぬ！？！？！？」

雅一は、改めてカノンの言葉に疑問を持った。

「死ぬ！？」

「そう、死ぬみたいなの…だから、あなたに協力してほしいの速くクラシックメンバーを集めないと、死んじゃうかもしね。だから助けて！」

カノンは、このチート級の奴を手元に置きたかっただけだったのだが、雅一は本当に助けてほしいと思って

「わかつたよ。どうせ出られないんでだし、誰かと一緒にの方が気が楽だしな」

「やつた！！ それじゃあ、まずはMCD貸して。GCTのデータをインプットするから。」

「ほい！」

MCDを渡す。

そして、数分後に

「これでよしつと。これから君は、解放軍で田下の灯のメンバー。  
よひしぐね」

カノンは雅一に握手を求める。

「ああ、よひしぐね。」

彼女の手は、暖かく柔らかいと雅一は思った。

「それじゃあ、まずは一番近くにいるシマケンの回収からね。」

MCDで、地図を確認しながら言へ。

「シマケン？」

「私たちの名アライバーよ！」

そうして、一人はシマケン！？を探しに戦場に出るのであった。

### 3 カノンの実力 銃を手に入れる

一人は、ビルや家などを伝つて慎重に行く。

「ところで、ここが日本ならこはどうなんだ？」

一戸建ての家の塀の後ろに隠れて雅一は尋ねる。

「ここは東京都と神奈川との県境あたりよ。そして、シマケンはある自動車会社の工場にいるみたい。」

そう言って、ＭＣＤの写っている地図を見せる。確かに青色の点滅が光っている。

「今、無線をむやみに使えないの。あつて、ＭＣＤ同士でじかに接続しないと盗聴の恐れが高くなるから。それで、暗号を送ったのＫＥＷつて」

「ＫＥＷ？」

二人とも塀にもたれかかり呼吸を整えている。

「ＫＥＷ。ケース、エマージェンシー、ウェイト。緊急の時に使う暗号で、とにかく動いて味方と合流してっていう意味。」

「なるほどウーハイトはおとりだな。」

「そつ。味方と合流することを第一優先にする命令で、ラッキーな事にみんなこの東京都と神奈川県の県境に集まっているから、簡単

に合流できるはず。シマケンは、運転が上手だから、すぐに車を確保したかったのでしょうね。自動車会社の倉庫にでも立てこもつているんじゃない。わあ、休憩終了。進むわよ。」

「おうー。」

そうして、少しづつだが進んでいく。

そして、川沿いの堤防の一歩手前まで来る。

「ストップ」

カノンは、突然手を横にだし、小さな声で言つ。そして、ハンドサインかなんかのだろうが、親指を立てて指をさす。雅一は、その方を見てみると、一人の軍服の男が立っている。

カノンが動き出す。

しかし、雅一にはハンドサインで知らせる。両手を交差させてぱつてんを作つている。たぶん動くなという意味なのだろうと解釈して雅一はうなずくとカノンは動き出す。

二人は堤防の下の住宅街との間にいて、周りを見ながら監視している。

そこへカノンは背後から少しづつ近づいていく。  
木の後ろに隠れた。

そして、石を持つて自分がいる位置とは反対側へと投げる。

### 『カラーン』

二人はすぐの音に反応すると同時にカノンが飛び出して、一人目を首にナイフを当てて切り殺す。そして、もう一人の男が振り向こうとした瞬間。

カノンは相手の口を押えて、眉間にサイレンサー着きの拳銃を当て静かに撃つ。

### 『バス』

音と共に男が倒れる。

### 『来ていいわよ。』

そつ言葉があつた後に雅一は、カノンのそばに行く。

### 『NPCだね。』

### 『何でわかるんだ?』

NPCにも関わらず消えていなく倒れている。

しかもしつかりと鮮血を見せている。

「一言もしゃべらなかつたし、こんなところでボサッと突つ立っているのは、NPCか、芋ぐらいしかいないわ。」

芋といつのは、その名の通り、地中に埋まっているように動かないことの意味が変わって、とっても下手なことをあらわす言葉だ。

「でも、さっきのは鮮やかだったな」

「やつ、ありがとう」

簡単に一言述べて、カノンは、一人の男のベルトなどを取る。

「ラッキー、AKの弾薬があった。それに手榴弾とスマートもある。それにあなたに」

そう言って、拳銃を投げてきた。

「もしものため護身用よ。拳銃はないよりあったほうがましだから。」

「ありがとう」

雅一は、久しぶりに拳銃を持つ。でも、昔雅一がやっていたVRM MODとは、似ても似つかなく。

とても精巧にできており、重量もしっくつぐる感じだ。

「それは、MP-443通称グラッヂ。NATOの弾薬とも相互性があるし、意外に弾薬が多いから使い勝手のいい銃ね。」

そして、ホルダーも渡してくれる。

「さういやー何でお前ってAK使ってるの?解放軍のバックはアメ

リ力何だから銃弾とかに困るだろ?」

AKと言つのは、元々ソ連が開発したためにアメリカなどと弾薬の相互性がない。

「それは、やつぱり使いやすいからかな?でも、任務によつては変えることが多い。だつて、AK-47はバラマキ専門だもん。」

AK-47は、命中率が極端に低いが、当たつた時のダメージ大きく扱いやすさや耐久性などがいいためテロリストなんかには好まれる銃だ。

「そついや、ビツやつて、武器を手に入れるんだ?」

雅一は、ここに来てから人の住む気配をまったく感じなかつた。

「まあ、その説明はおいおいするわ。この銃を持っているわけは、ただ前にログインして使つていた武器がそのまま今回のログインに反映されたみたい。だから仲間が集まつたら武器の補充をしないとね。」

「そつなんだ。」

雅一はカノンが説明をばぐらかしたのは気に入らないと思つたが仲間に会つ方が先だと思つて頷く。

カノンの実力がしれたいい機会だつた。

二人は、まだまだ先へと進んでいった。

### 3 カノンの実力 銃を手に入れる（後書き）

銃を本格的に登場し始めたのですが、

くわしく説明するかどうか迷っています。

もし、銃関連でわからないことがあつたら、検索して調べることをお勧めします。

なるべく、銃の知識がない人でも楽しんで読んでいただくように努力します。

#### 4 切り込み シマケンの正体

一人は、少しづつ進んでいった。

しかし、敵と遭遇することなく、目標の工場へとたどりついた。

「ようやくか~」

雅一はちよつと背伸びをするのだが

「伏せて!」

その言葉を発した後カノンは、雅一を無理やりしゃがませる。

「どうしたんだ?」

小声で聞く。

「何か、向こうにあるつて書いてある倉庫で人の音がするの

「本当か?」

足音すら聞こえていない状況で迷っている雅一だったのだが、

「ああ、あなたの出番よ。」

「俺に何させるんだ!~?」

「ちよつと様子見ててくれない?」

親指は2と書いてある倉庫を指さしている。

「ああ、わかつたよ」

「私も後ろから付いて行くから。」

雅一は、近づいてみると軍服の男が三人立っていた。  
そして、ドアを開けようとしている。

「今がチャンスだな。カノン一人は任せる。お前が発砲したと同時に俺は突っ込むから。」

「了解」

気づかれないように近づき50メートルを切ったところで、カノンがAK-47から銃弾をまき散らした。

「ほらほら！こっち！」

そのバラマキで一人が倒れて二人が体勢を立て直し銃をこちらに向けようとした時に雅一が動いた。

「スキル疾風」

スキル疾風と言つるのは通常の移動速度を1・5倍上がるスキルだ。

そして、雅一は、一人目の奴の心臓部分をぶっさし倒れかけて横に

なつていると同時に、さっさ手に入れた拳銃グラッチをホルダーから抜き取り。

『バン、バン、バン』

三発銃弾が飛ぶ。

その内一発が胸と腹部に直撃して倒れる。

その後カノンが、頭に鉛弾を撃ち込み完全に沈黙させる。

雅一は、倉庫のドアを開けて中に入つて行くと。

「止まりなさい。」

その手には、MACを持った女の子が立つていた。

雅一はつづく女に狙われるのが趣味らしいと思つてしまつ。

身長は150? 前半くらいで胸が少し大きく、赤髪のショートの子だ。

「あの～銃を下ろしてもうえませんか?」

「あんた、誰かつて聞いてるの?」

雅一は、カノンと同じように下から田線の言葉で話しかける。

「俺はですね。ミノマサと並んでプレイヤーでしてね。今は月下の灯

ところへランメンバーなのですよ。はい。」

なるべく、丁寧に話したつもりだと雅一は自負する。

「用下の灯……ってでも、あんたみたいな男はいなかつたはず。」

女の子は用下の灯と皿の葉に反応してくる。

その時にカノンが中に入つてくる。

「那人、新しく入つた人だから。」

カノンを見た瞬間女子に安心感に包まれたような雰囲気になる。

「やうなんですか？ それなら許してあげる。」

「許してあげるつて」

この女子の性格をだいたい把握できた雅一だつた。

「用下の子がシマケンよ」

「えつーー名前からして男じゃないの？」

雅一はさつとシマケンを男だと思つていた。

「それは、兄貴のＨＤです。たまたま兄貴が途中で放置したこのＨＤを借りてやつていましたから。できる限り。シマコと呼んでください。」

「ああ、わかったよシマコ」

そうして、一人はシマケン…シマリと合流できたのだ。

「次は、アカネとキリとの合流ね」

カノンはミロを見ながら言つ。

「シマリ。車の確保はできた?」

シマリは、自慢げな顔になり

「もちろんです。いっしに来てください。」

そこには、高機動車があった。

高機動車と言うのは、陸自が配備している人員輸送用車両の事だ。

「さすが。シマリーこれでこれから移動が楽になる。後、敵さんからの土産もあった。」

そうして、カノンは銃、弾薬と手榴弾を持ってくる。

「銃は、AK 47が二丁と、あとRPKにその弾薬の7.5連ドラムマガジンも二つもあったわ。これで、軽機関銃を使う事が出来る。

」

RPKとは、軽機関銃で7.5発撃つ事が出来るソ連の銃だ。

「それでは、一人とも行きましょうか。シマリ運転よろしく

そうして、銃などを持って高機動車に乗り込み。

シマリがエンジンをぶかして、倉庫から走り去った。

新たに増えたシマリと共に一人との合流するポイントに向かうのであつた。

## 5 一人の戦闘 一人の合流

3人は高機動車に乗り

廃材やコンクリートの破片をよけつつ進んでいった。

「でも、車だと目立つんじゃないか？」

雅一は、後ろに座っていたためちょっと乗り出して助手席に座っているカノンに聞くと。

「大丈夫なんじゃない？見つかればAKでも撃ちまくって逃げればいいんだし」

そつけなく返事が返ってくる。

「そんなものなのかな？」

「そうそう。」

どんどん北西の方に進んでいき学校が見える。

「ここが、二人が立てこもっている場所ね。」

校門の前で高機動車が止まる。

「それじゃあ、シマリはここで待機。私たち一人で様子を見に行きましょ」

「わかった」

「はい」

返事をしたと同時に銃撃戦が聞こえる。

「毎回こんな感じだよな」

雅一がうなだれながら囁つ

「あなたって疫病神なんじゃない? だつて、間違つてログインしてきてこんなことに巻き込まれたんだから」

ログインを間違えてきていることを知つてはカノンだけなのでシマリは首をかしげる。

「疫病神つて失礼な!」

雅一は抗議するのだが無視されて

「ああ、行くわよ。」

そうして、カノンは、A K 4 7を二丁持ち。  
雅一は剣とグラッチをホルダーにしまつて進んだ。

『バン、ドン、ドドドバババ』

カノンが俺を手で押さえる。

銃撃の音がだんだんと近くなつてくる。

「Jの先みたい。」

雅一は、そつと覗くと教室をはさんで銃撃戦をしていた。  
女の人が一人で銃撃している。

それに、三人の軍服の男が応戦していた。

「やばいんじゃない！？」

雅一は心配そうに言うのだが

「大丈夫よ。絶対勝てるわ」

女の人G4を窓越しに撃つて応戦するのを、AK-47を持つた  
軍服の男が応戦している。

徐々にコンクリートが削られていき穴が開いている個所も多数みら  
れる。

それでも、G4をぶつ放しては隠れと威嚇しながら撃つている。

「本当に大丈夫？」

雅一がこの劣勢な状況で心配している。

「もうそろそろ終わるかな。」

カノンがそう言つと突然一人が倒れる。

そして、紫色の髪のツインテールの女の子が突然出てきて、ナイフ  
でもう一人を切る。

そして、その間に教室に立てこもっていた女の人が飛び出てM4をぶつ放し最後の一人も倒れる。

戦いが終わるとカノンが普通に歩いていき

「さすが！キリにアヤネもやるね～」

そう軽い感じの口調で言いだす。

「まあ、こんな所ね」

そう言つたのが先ほどまで教室に立てこもっていた女の人が黒色で髪が長くとてもきれいな人だった。

「当然」

簡単に一言で終わらせたのが身長が150?前半ぐらいの紫色の髪のツインテールの子だ。

そして、雅一が出ていくと、M4と拳銃を二人同時に向けられる。

「誰？」

「……」

雅一は、なれたように手を挙げて

「撃たないでくれよ。」

「大丈夫よ一人ともこの人新しく仲間になつた人だから。」

そして、カノンがフォローする。  
そういうわれると二人とも銃を下ろす。

「俺の名前はミノマサだ。よろしく。」

そう言つと黒髪の人が、

「私は、アヤネ。まったくカノンはいい男を見つけたじゃない」

「いやいや、違つて」

そんな風に会話が繰り広げられると

「…キリ」

紫色の髪のツインテールの子が簡単に自己紹介を終える。

「アヤネにキリもよろしくな！」

「最後に、シモハルとカオルとの合流だけど結構距離があるから明日にしましょ。シマリを車」と二つに分けて呼んで二度一泊ね。」

カノンがMCDを見ながら言つ

すぐさまシマリに連絡するとものの数十分で二度三度来る。

そして、アヤネとキリとの再会に喜びつつサバイバルゲーム一日目が過ぎていぐ。

そして、夜の見張りを3時間おきの交代にしむことになる。

雅一はぱっと星空を見る。

「これって全部ヴァーチャルだもんな」

雅一は、今までゲームを詳しく見たことがなかつたので改めて感慨にふけつていた。

「しかし、今日はいろいろなことがあつたよな~」

一田でいろいろなことが起きた。

サバイバルゲームの開始やカノンたちと仲間になつたりといふことがあつた。

そして、雅一はこの先も不運がないようこと切に願つた。

## 6 一人が逃げる 雅一が飛び出す

一夜明け、また移動を開始する。

5人と大所帯になりつつあるが高機動車は、定員10人なのでまだ余裕がある筈なのだが。

後ろには銃などの弾薬が置いてあり意外にスペースがないのも現状だ。

キリは、黙つて座つており。

アヤネは足を組みながらリラックスしている様子であつた。雅一もそれなりにリラックスしている様子だった。

敵に遭遇することなく進んでいった。

時速40キロと遅めなのだが歩いていくよりかは大分違うなと雅一は実感した。

ゆつたりとドライブ気分でくつろいでいたのだが一発の手榴弾によつて変わってしまう。

『ドカーン。バンバンドド、バン、ドカン』

急に戦闘が始まったのだろうか突然轟音が鳴り響く。しかし、周りで起きたわけではなく。

この辺で戦闘が開始したようだ。

「ストップ」

カノンの声と共に車を一旦停止させる。

「キリ状況確認よろしく」

カノンに言われてキリは、

「了解…」

簡単に装備などを点検してキリは出していく。

「俺もいく」

そういうて雅一も付いて行こうとしたのだが

「あなたは邪魔なだけ…」

そう言って雅一も付いて行こうとしたが

「カノンいいよな?」

雅一はクランリーダーであるカノンに訊ねる。

「いいわよ。キリと一緒に来つてきても

「カノン…」

キリが目で訴えるがすぐに諦めて

「付いて来て」

一言だけ言われた。

「わかった」

そして、キリと共に瓦礫の下を通りて行き少し広い道路に出た。

「ストップ」

キリに止められて雅一が目の前に広がった光景は、20～30人の軍服のNPCと装甲兵員輸送車二両から必死に逃げている一人の女の姿だった。

二人とも建物にそつて銃撃しつつ逃げているがどう見て不利なのは確かだ。

装甲車両からの機銃掃射も相まって余計不利な状況だ。

「おい、どうするんだよ！？」

そんな心配はよそにキリは、冷静に戦場を見ていた。

「敵は、26人に、装甲兵員輸送車二両はたぶんソ連のBTR-Dだから。追われているのは解放軍。」

「解放軍って味方じゃないかよ！どうするんだ！？」

「二人だけで対処は無理。カノンたちを呼ぶ…」

そう言って片耳だけでつけるヘッドセットを装着して連絡を取る。MCUとワイヤレスでつながっており通信の際には便利なものになつている。

そんな中状況は刻一刻と変わつている。

二人は頑張つて逃げてはいるが追いつかれそうで、ついに3階建での建物に立てこもつた。

一階部分で必死に応戦はしているが数が数なので反撃の隙がわずかしかなかつた。

徐々にせまる敵に何もできずにいたのを見て雅一は手にじぶしを作り握る。

「キリまだか！？」

雅一は、キリに催促するが、

「まだ」

しつかりと冷静な目で戦場を見ている。

そんなキリに愛想つかした雅一は自ら行動することにした。あと一歩で中に入れられそうなところで雅一は動いた。

「ちょっと

キリの叫びも無視し。

「まじこつちだ！！

大声で誘導しながら

「炎の魔法、ファイヤー」

レベルが低くても使える魔法なのだがFPSは魔法がないためかな  
り有効だ。

それにて炎の壁ができる。

こちらを見て敵も発砲する。

『唐宋文人』

ぎりぎりビルの中に飛び込む事が出来た。

# 「大丈夫か？」

真っ先に一人の無事を確認した。

二二

そう返事をしたのと、茶髪のサイドボニーの女の子だった。

「ありがとうございます」

丁寧な物腰で言つたのが金髪のロングのF.P.Sには似合わないお嬢様なような女の人だつた。

「助けてくれたのはありがたいけど、これからどうするの？」

茶髪のサイドポニーの子が聞いてきたため。

「任せとカー！」

雅一は剣を持って戦場へと飛び込んだ。

雅一は、まず三人に狙いをつける。

「スキル神風＆疾風」

神風は五倍速くなるスキルで疾風と合わせることにより八倍に上がる。

ただしこの合わせスキルを使うと一日スキルと使うことができなくなる。

八倍の速さに達すると敵の動きがスローモーションに見える。  
そして、銃から吐き出される銃弾も野球ボールが飛んでくるときの  
感じみたいな速度に見えてくるのだ。

雅一は銃弾をよけつつ、銃弾を一つ切りそのまま一人の男を首」と  
切断する。

そして、もう一人の男には、片手でグラッチを抜き三発撃つと一発  
が顔に当たりそのまま倒れる。

もう一人が銃弾を至近距離から撃つがしゃがんで避け一つ銃弾を切  
りながらそのまま首」と切る。

なぜ雅一は首や顔を狙うかと言つと胴体などには、防弾もしくは防  
刃チョックなどを装備しておりダメージが少ないと考えたからだ。

しかし、首を切るときの感覚はとても嫌なものだと雅一は感じる。

残りも数人ちょいに減つてきたところで後ろからサイドポーーの子がUMPでリズムよく撃つている。

UMPとは、サブマシンガンで軽さと凡庸性に優れた銃だ。

それをリズムよく撃つことによつて二人に当たり他也一時的に動けない状況が出来た。

たとえ一瞬であつても雅一にとつては長い時間でその際一人に近づきグラッチを撃ち一人を倒すと隣にいた兵にもグラッチをおみまする。

そして、五メートルぐらい離れた兵から放たれた銃弾を一気に五発分を切る。

そして一人を突き刺し、残り四人と装甲兵員輸送車二両が残る。

そして、装甲兵員輸送車から銃弾の嵐が降つてくる。

それを回避しきれない分を剣で銃弾を切つていたら。

『ピキ、ピキピキ。パリン』

使つていた剣の剣先が見事に真つ一つになつてしまつた。

「えつ！」

雅一は頑張つて素材とお金を集めて作った剣にものすごい愛着があ

つたのだが壊れてしまつてショックを受ける。

しかし、戦場は無常なものでショックを受ける暇もなく銃弾の嵐が降り続く。

さすがに何発かは、かすりはしたが致命傷を負つてはいなかつた。

「まざいな……」

雅一がピンチな時に。

突然装甲兵員輸送車の射撃手に銃弾が降り注ぐ。

一人は頭に直撃し倒れてもう一人は後ろから忍び寄つたキリによつて切られる。

「おお……」

雅一は、カノンたちの姿を確認する。

残り四人もカノンとシマリが放つた銃弾により沈黙する。

そして、アヤネが装甲兵員輸送車の運転席に座つていてるNPCを引きずり出しナイフでバツサリ切ると戦いが終了した。

「サンキューみなみ！」

雅一は命を救われたのに感謝をする。

「まったく、とんだ荷物を見つけたかも」

カノンが毒づき。

「あれだけの人数でよく飛びこむような無茶をしますね。あなたはバカなんですか？バカ！？」

シマリが怒っているのだがどこか心配そうな感じで言つ。

「まったく、そういう子。意外に好みよ」

アカネが雅一に近づく。

「それより、一人とも大丈夫！？」

近づいてくるアカネを無視する。

雅一の胸がドキドキしたのは男なので仕方のないことだ。

二人は建物から出てきた。

「ありがとう」

「ありがとうございますわ」

二人ともお礼を言つ。

「二人とも名前は？」

茶髪のサイドポニーの女の子がまず最初に囁つ。

「私はシノミ。フリーの傭兵。そして、いつかの子が……」

シノミが紹介しようとしたときに金髪のロングのエマに似合わないお嬢様のような女の人、口をはさむ。

「私の名前は、確か……ヒ・メでよかったですわよね？ 美夏ちゃん！」

「わあーーわあーー、本名はちやダメーー！」

慌ててシノミがヒメの口をふさぐが時すでに遅く全員に聞かれる。

カノンがふざけて

「よろしくね！ 美・夏・ちゃんーー！」

やつぱりシノミが顔を真っ赤にした。

## 8 新たなる増員 車両交換

「初めて聞きましたよ」のGUYで本名なんて」

シマコが更なる傷口を広げようとする。

「ちゅうど、ちゅうど」

シノミが慌ててこらが

「あらあら～大変なことになってしまったわ」

ヒメは笑いながら状況を面白がってこらかのよう見える。

「ちよつと、ヒメにあれほど本名をこつちやだめつて書つたのこせ  
つそく破るなんてーー！」

「まあまあ落ち着いて。美・夏・ちやん」

雅一が言つたら。

『力チャヤ』

シノミがGUYの銃口を雅一の方に向ける。

「次にしゃべつたら頭が吹つ飛びわよ。」

すぐに雅一は手を挙げて

「撃つなーはやまるなー話せばわかるーー！」

「しゃべるなって言うのが聞こえなかつたのかなー??」

シノミは、UMPのセーフティーリース解除する。

「二人とも落ち着いて」

カノンがUMPを手で持ち上にあげる。

最初の原因はお前だるーと雅一は心の中でつぶやく。

「やつですわー……えつと、シノミちゃん！人にむやみに銃を向けては、いけませんわ」

ヒメも一人の喧嘩の仲介をする。

元々の原因は誰かな？そんなことを一人して考えていたことは一人とも知らず。

「それで、あなたたちは、フリーの傭兵つてことでいいのね？」

カノンが一番最初に聞いた。

「そう、でもヒメは今日が初めてなの。私が誘つたせいで」

シノミが顔を下に向ける。

「シノミちゃんそんなこと気にしてませんわ。」

ヒメは、暖かい笑顔で言う。

「でも……」

「それじゃあ、ヒメの事情を教えてくれないか?できる限りで」

雅一は、なるべく話をそらそうとした。

それにヒメは乗ったのか話し始める。

「私は、ずっとお家にいましたの。外出する時も周りに人がいるのが普通でしたわ。でもシノミちゃんは、そんな私を見て遊びに誘ってくれました。それで今日は、シノミちゃんがいつもやっている。え～と、R...MM...O...F...PSというのと一緒にやりましょうと言つて誘つてくれましたわ。それが事情ですの。」

「なるほど、それでこのサバイバルゲームに巻き込まれたわけだ。」

雅一は、ヒメとシノミの話を聞いて納得する。  
さらに、ヒメがお嬢様だと推測できる。

カノンが顎に手を置きながら

「それじゃあ、私たちのクランに入らない?」これから先、一人だけ  
じゃあ大変そうだし、旅は道連れって言つでしょ。」

「それは、嬉しいんですけど」

シノミは、難しい顔をして考えているが

「シノミちゃん。いいじゃありませんか。この人達となら大丈夫だ  
とわたくしは思いますわ。」

「ヒメがシーリーに皿をひねひねせせながら皿」。

「ヒメがせうこうなら。カノンさん私たちクラシコはこうますよ。」

「ひぬひぬに負けたシーリーが頷く。

「さすが、美夏ちゃんですわ！」

「だから、本気でちやだめだつて……」

「ゴホッ。それじゃあ、『月下の灯』によひね。シーリー、ヒメ！. MCD貸してくれるかな？」

「はい」

シーリーはすぐにもCDを渡すのだが、

「えむしでい～？？？」

ヒメは頭の上にほんなマークがたくさんついていた。

「これがMCD。結構重要なだから大事にしないとだめよ」

シーリーがヒメにMCDの説明する。

そして、カノンに渡す。

「これよしつと、一人ともこれからクラシメンバーよ。よろしくね。

」

新たに、一人仲間になつた。

「私は、アヤネ。よろしく」

「シマリって言こまーす。」

「…キリ」

三人とも自己紹介を終える。

「さて、この装甲兵員輸送車どうします?」

シマリが無傷のまま残つてゐる装甲兵員輸送車を指さす。

「そうね。それなら一両とももひつていいつか。高機動車から武器弾薬を下ろして」

カノンが提案するのだが

雅一が疑問に思つたことを口にする。

「でも、一両はシマリが運転するとしてもう一人は誰が運転するんだよ?」

「私よ」

「カノンが!?」

雅一はカノンが運転技術を持つてゐるなんて信じられなかつた。

「何でそんなに驚くのかなー私は、車両程度なら運転できる技術を

持っていますー」

アヤネが

「二人とも痴話喧嘩せず。武器弾薬の移し替えるわよ」

「痴話喧嘩じやないーー」 ×2

「息ぴつたりじやない」

「やつですわね~」

カノンと雅一が息ぴつたりな発言をしたあと  
高機動者から装甲兵員輸送車に武器弾薬を移し替えて  
一人の回収に向かった。

## 9 車両の説明 銃剣と銃撃音

「 もういえば、 IJの装甲車の名前なんだ？」

雅一は、でこぼこなコンクリートの道路の上をゆっくりと走っている装甲兵員輸送車に激しく揺られながらカノンに訊ねる。

「 何だつけ？ キリ」

「 BTR D」

「 もうう、 BTR Dだ。 たしか……」

雅一はいやな予感をしたが一歩遅く。

「 ソ連の装甲兵員輸送車で空中での輸送できて、 空中投下も可能だつたはず。 兵員室には完全武装の空挺兵十人を搭乗させて輸送できて。 兵員の乗降は、 天井の一か所のハッチと後部の大ハッチがあつてそこから人の出入りができる。 そして車体には一か所の銃眼があつて。 消火装置と NBC 防護システムも設備されている万能な装甲車なの。 そして、 NBC 防護システムっていうのは、 N が核兵器を意味する N u c l e a r で B が生物兵器を意味する b i o l o g i c a l。 最後に C が化学兵器を意味する c h e m i c a l。 その頭文字をとつて NBC。 それらに対応できる設備が備わっているつてことね。 」

またもや、 先ほど銃撃戦より激しい口撃の嵐に雅一は、 ちょっとと引き気味になる。

キリは、 何もなかつたかのようにして座つてゐる。

「キリお前は大丈夫なのか？」

「……慣れた……」

そのキリの言葉がすゞぐ印象に残つた雅一だった。

「あと二入つて何て名前なんだ？」

雅一は、揺られるなか頭をぶつけないようにしてカノンに聞く。

「あと二人は、カエデとシモハルよ。一人とも狙撃が得意なの」

前を見つつ雅一と話すという器用なことをしながら言つ。

「（）のクラシって結構バランスいいよな。狙撃が出来る奴や、近接戦闘が出来る奴、運転ができる奴もいるんだから。」

「そうね。集めたら勝手にそうなつたのが正しんだけどね。」

車内は、エンジンと音と車輪が石を巻き込む音のみが聞こえてくるようになった。

前を走つていた装甲車から無線がかかる。

「（）さん、シマリ。こちひ、シマリ。聞こえますか？」

カノンが、無線のスイッチをオンにする。

「聞こえます。どうしたの、シマリ？」

「もう少しで合流地点に到着するのですがここいら辺で降りて徒歩で行きましょう。」

シマリの提案に少し悩んだ後

「了解。 その瓦礫の下に入れると想つから、そこから徒歩で移動ね。」

「シマリ、了解。」

無線の切れる音がする。

「二人とも聞こえたわね。」

「…うん」

「聞こえたぞ。」

そして、がれきの下に装甲兵員輸送車を二両入れる。

「二人とも出ても大丈夫よ。」

後ろにある扉から二人は出る。

「疲れましたわ。」

「ヒメ、大丈夫か？」

「肩が凝りそうね。」

もう一つの装甲兵員輸送車に乗っている3人とも出てきて背伸びをしている。

7人が集まりカノンが口を開く。

「シマリとシノミヒメはここで待機して。4人で合流地点に向かうわよ。」

「ありがとう。カノンさん」

シノミがカノンに頭を下げる。

「もう、仲間なんだからカノンでいいわよ。」

「わかった。」

「他のみんなもいい??」

「了解」×6

各自武器弾薬を再確認して合流地点へと向かつ。

「ここから、どれぐらいかかるんだ?」

「そうね…30~40分ぐらいじゃない。」

剣が折れてしまつたために変わりの銃としてM4を持っている雅一がAK47を二丁もつてゐるカノンに聞いた。

後ろからは、RPKを持っているアヤネとM4を持っているキリが

後ろから付いて来ている。

ちなみにキリのM4にはなぜか銃剣が装備されている。雅一のことは、アンダーグレードが装備されている。

「キリ、何で銃剣なんか装備してんのだ?」

雅一が後ろに向き疑問に思つたことを聞く。

「……弾薬がないから……」

「弾薬がない?」

キリの言葉にはてなマークを浮かべる雅一だった。

「キリは、銃剣が弾薬も関係なしに使えるから……って言つ事よ。」

カノンが代わりにたえる。

「なるほどな」

雅一は、きりりと光る銃剣を一見して前を向き直り進む。

数十分歩いていると。

バーン ドード ダダダ ドン ドン

銃声が鳴り響く。

「「」」のパターンは……」

「まったく、あなたは本当に疫病神みたいね。」

「それは、言わない約束だろーー。」

四人は、走りながら銃声音が鳴り響く場所に向かう。

「いつて見ると想像通り二人の少女がビルに立てこもって抵抗している風景が広がる。」

「敵がおおいかしら」

アヤネが、状況把握をする。

「それなら、シマリに連絡して車を出せる準備をさせないと」

「そつ言つてカノンは、無線でシマリに連絡を取る。」

「シマリ、緊急事態よ。あと3、40分したらそつちに向かうから、車をいつでも出せるようにエンジンを温めておいて。」

「わ、わかりました。」

シマリが慌てた様子で無線を切る。  
カノンがみんなの顔を見渡す。

「ミノマサだっけ？名前。あなたのスキルでこの状況をどうにかできなーいの？」

「無理だな。さつきの時でスキルを使い切つて一日たたないと回復しないし、なんせ剣まで折れちまたからな。」

「使えない疫病神ね。」

「ほつとけ」

カノンが銃撃の音を聞きながらその様子を見て  
「それなら、私と疫病神が一人の所に行くから、二人はここで待機  
して。」

「俺の名前は疫病神かよ…」

「わかつた」

「…了解」

「へいへい、わかりました。」

二人はビルへと向かうために飛び出した

ドードード ダダダ

敵のAK-47から吐き出される7.62×39mm弾がコンクリートに当たつて穴をあけていく。

二人は、屈みながら少しずつ、がれきなどを盾に進んでいく。

「ストップ。ちょっと待ってね。」

ベルトから手榴弾を取り出してピンととり、投げ捨てる。

ドーン

爆風が起き破片が舞い散る。

「今よ！」

カノンの合図と共に屈むのをやめて一気にビルまで向かう。

カノンは窓から飛び込み。

雅一は、ドアからスライディングみたいな感じで中に入つて行く。

「二人とも大丈夫！？」

「カノン！」

「やつと来てくれた——」

二人とも160?前後で一人が茶髪のショートの女の子で、もう一人が青色の髪で、後ろでお団子みたいな感じにまとめている女の子だ。その二人は、雅一に片手でもついている拳銃の銃口を向けている。

「はは…なんか俺のキャラつて…」

おとなしく手を挙げてM4を地面に置く。

「二人ともその人は新しく入った人よ。」

「そうだ。ミノマサだよろしく。」

「そりなんですかー。私は、カエデといいまーす。」

茶髪のショートの女の子が拳銃をホルダーにしまつ。

「私の名前は、シモハル。よろしく!」

青色の髪で、後ろでお団子みたいな感じにまとめている女の子も拳銃をホルダーにしまつた。

「それで二人ともここから30分したところに車を待たせているからそこまで撤退戦よ。」

「いきなり、大変だな~」

「もつ、最後はおいしいものでも食べたいよ。」

二人とも絶望的な顔もせずに逆に明るい。

カエデは、M21を持っている。

シモハルは、M24を持っている。

M21はアメリカの軍隊が採用しているセミオートの速射ができる狙撃銃だ。

M24は、ボルトアクションの速射はできないが一発のダメージが大きい銃だ。

「ミノマサ！私たちがその扉から出していくから」

カノンが銃声でかき消されないように大きな声でいい扉の方を指さす。

「わかった！」

雅一も負けずと大きな声で了承する。

雅一が窓から顔をだしM4をぶつ放す。  
撃つのがすぐに銃撃が集中してすぐに隠れる。

「もうちょっと頑張つてよ！」

カノンたちが出るタイミングを見失う。

「いは、私に任せなさい。」

カエデがM21を構える。

「それなら、カエデとミスマサ。援護よひへべ。」

「ミスマサ君行くわよー。」

「了解ー。」

言葉と同時にカエデが窓から顔をだしM21を撃つ。  
雅一も同時に顔をだしM4を撃つ。

「すげー」

雅一は、カエデの射撃の腕に感心していた。

一発一発が雑なのが敵に吸い込まれるようにして当たる。  
それに比べて雅一はかすりもしない。

「あたらねー」

雅一が窓の下に隠れて弾倉を交換する。

二人が援護しているすきにカノンとシモハルは飛び出してアヤネと  
キリの居る場所に何とかたどりつく。

「シモハル久しづりー」

「アヤネさんも久しづりですね。」

「感動の再開はここらへんにして一人をどうかしないこと

十数人の敵に囲まれて一人は動けないでいる。  
徐々に押されている。

ダダダ パスパス

コンクリートと銃弾が当たる音や貫通する音が聞こえる。

「！」の状況やばくないか…」

雅一が二回田の弾倉を交換している。

「弱音を吐かない！」

隣でカエテもM21の弾倉を交換している。

「あと弾どれぐらい？」

「えーと」

雅一がベルトやポケットを探つて

「あと、5つある。」

「そうですか……それならアングレでかく乱して合流しましょう。」

アングレと書つのは、アンダーグレネードの略称だ。

「わかった」

雅一がM4を構える。

「合図しますから5・4・3・2・1・今です！」

「おら、もてつけ！！」

M4のM203 グレネードランチャーから40mmグレネードが  
撃ち出される。

ドカーン

激しい爆風と共に一人は動き出し瓦礫の下に来る。  
それだけでは、敵の勢いは衰えずすぐに銃撃を再開する。

「これ以上いけん。」

雅一は、M4で敵を狙うのではなくただ威嚇するためだけに撃つ。

「ちよつとまざいですね。」

瓦礫のコンクリートがはがれていつている。

「ピンチだな。」

「そうかも……」

一人は、がれきの下で抵抗できずにいた。

「どうするんだ！？」

雅一は、M4の弾倉を変える。

「動けないからどうしよう？」

カエテは息を整えている。

「カノンたちは何をしてるんだ。」

雅一が言うと同時に爆発音が聞こえて

「早く来て――――――！」

カノンの大声が聞こえる。

「カエテ走るぞ！」

「りょうかい！」

二人は走つて行きカノンたちと合流する。

「今から少しずつ撤退していくわよ。付いて来て」

後ろからみんながついていく。

しかし、敵部隊もこちらに来て銃弾の嵐を浴びせる。

六人は瓦礫の下に隠れて銃弾を防ぐ。

「それじゃあ、交代交代で下がって行くから。肩で触れたら後ろに下がる方法で行くわよ！」

「ここから見ただけで敵は3・40人入る。

「反撃開始」

カノンの言葉と共に銃弾をぶつ放す。

「おひおひー！」

「散れーー！」

「……」

そして、カノンがアヤネの肩をたたきカノンが後ろに下がる。

「まだまだ」

雅一はM4を確実に当てるように撃つてているが当たらない。

その隣でシモハルとカエテが狙撃で確実に当てている。

「はい、次」

アヤネがキリの肩をたたき後ろに下がりRPKの弾倉を変える。

「…どうぞ」

キリがシモハルの肩を叩く。

その間にも銃撃はやまざコンクリートが次々とちりとなつて舞う。

「次、カエテ！」

シモハルがカエテの肩をたたきM24から拳銃のM9に持ち替えて後ろに下がる。

「最後です。」

カエテが雅一の肩をたたき後ろに下がる。

「もういいかな。それじゃあ、炎の魔法でももらつとけ！」

炎の壁が出来て雅一は後ろに下がる。

「ミノマサ！ あれ何！？」

シモハルが炎の壁を指さす。

「詳しいことは生き延びてからね。ミノマサ・アングレの煙幕で一気に距離取るわよ。」

カノンが質問を後からにして雅一に指示をする。

「了解

雅一がM4のアンダーグレネードから煙幕弾が撃たれ周りが白く包まる。

「今よ！速く！速く！」

六人は走つて行く。

瓦礫を利用したりしながら進んでいく。

しかし、銃弾の嵐はやまず強烈な爆音と共にビルが倒れる。

「危ない！」

カノンが雅一を押して瓦礫を逃れる。

「た…たすかつた」

目の前に瓦礫の残骸を見てほつとする。

「RPGまで使つてきた。」

「RPG??」

「RPGは、ゲームのジャンルのrole-playing gameの略ではなくて、ソ連が開発した携帯できる対戦車ロケット RPG-7で威力もそこそこあるわ。それの略していうのがRPG。」

手榴弾の爆発音や銃撃の音が響いている。

「なるほどな

FPS系のリアルの銃に詳しくない雅一にとっては分かりやすい説明だった。

「敵がRPGまで持つてるとなると厄介ね。何か魔法使えないの大がかりな。」

「残念ながら俺は専門が剣士で魔法は必要最低限しか使えないんだ。」

「

雅一は、剣士で素早さを特化させてあるため魔法は付加魔法を中心としていて攻撃魔法はたくさん覚えていない。

「使えないわね。みんな！スタン投げるから走ってね。」

スタンと言つのはスタンングレネードで閃光と音を出す非殺傷用の武器で目くらましには最適だ。

後ろから強力な光が放たれ音も一緒にまき散らす。  
後ろを振り向かずにただ前だけを向いて走っている。

カノン達がよつやく装甲兵員輸送車が見えてくる。

「見えた！」

カノンが叫んだのと同時にRPG 7の弾頭が飛んできてそれがビルに当たり崩れ始める。

「みんな急いで！」

カノンがまた叫んで一斉に走り出すがシモハルとキリが取り残される。

カノン達との間にでかいコンクリート残骸と看板が立ちふさがる。シモハルはボルトアクションの連射に不向きな銃を使っているがすごい速さで撃っている。

キリもM4を丁寧に撃つて近づけないようにしている。二人はビルの中に閉じ込められている状況になつていて、唯一の窓は敵が来るため使えないでいる。

次々と敵が追ってきてAK47をぶつ放している。倒しても倒しても出てくる。

「キリビリショウー切りがない！」

シモハルが叫ぶ。

「キリがいて切りがないか、ダジャレつまいまー」

雅一が明るい声で叫ぶ。

「いつたい何考えてるのよー!？」

カノンが怒り出してそわそわと焦りだしている。

「任せる。ロープだけ貸してくれ。あととRPGで培つてきた技術を見せますか

雅一が準備運動をして体をほぐしたりしている。

「はい、ロープ。」

カノンが装甲兵員輸送車からロープを持ってきて渡す。

「カノンたちは、車に戻つていつでも出せるよにしておけ。」

「本当に大丈夫??」

心配そうな顔を見せる。

「大丈夫だ。」

「わかつたわ。あなたを信じてみる。」

「ああまかせておけ」

カノンたちは装甲兵員輸送車へと戻つて行つた。

「さてと行きますか。」

雅一は目の前に立ちふさがるビルを眺めて動き出した。

誤字脱字、感想、評価待つてます。

雅一はビルを観察する。

一階部分はコンクリートのみだが3階部分辺りに人が三人通れる穴が開いていた。

「あそこだな」

雅一は魔法を使う。

「付加魔法を多重でかけて」

いろいろな魔法が頭の中をかけて様々な付加魔法を選び出す。

「これと、これとこれだな」

3つ付加魔法を選択して三重魔法を使う。

魔法は、体が軽くなる。ジャンプ力を上げる。足の下の負荷を軽減する。の三つだ。

雅一はもともと攻撃魔法は苦手だったのだが付加魔法はいろいろと覚えている。

今回はこの三つを使いことにした。

「さて、待つてみよ！」

魔法の能力からわかるように一気に三階部分まで飛び着地する。

その間銃撃音は鳴り響いている。

「どうする？」

「……」

二人は何とか耐えているだけで次に RPG 7 の弾でも飛んできたものならば一瞬で粉々だ。

ド――――ン

突然上から轟音が鳴り響き、上の一 部分が崩れる。

「何！？」

「…敵」

二人は慌てて銃を構えて砂埃が舞うのが終わるのを待つている。

「ゴホッ。ゴホッ。手榴弾の威力強すぎだろ！」

突然雅一が降ってきたのだ。

雅一は二階部分から降りるとこりを探したのだが見つからず。

「ないなら作ればいいか」

シモハルとキリがいなさそうな場所を探して手榴弾を置いて走って離れようとするが手榴弾が爆発するのが早く。

ド――――ン

そのまま落ちて行つた。

咄嗟に雅一は付加魔法を二つ掛けた。

一つは肉体強化。全身耐衝撃。

そして床に激突したがたいしたダメージにもならず周りは埃が待つてているが立ち上がり。

「ゴホッ。ゴホッ。手榴弾の威力強すぎだろー。」

そういうと銃が向けられる音が聞こえて。

「ミノマサー？」

二人の姿が見えた。

「二人とも無事か！？」

「…うん」

「 もりひろんです。」

敵の銃撃は砂埃により少しの間、静かな時間が続く。

「 一人とも逃げるぞー！」

「 どうやつて？」

二人を雅一が両腕に抱える。

「 ちよつとーー！」

「 ……」

付加魔法がかかっているために、軽々しく持ち上げる事が出来る。

そのまま三階部分まで上がつてると雅一の耳に大ダメージを『』え  
るぐら<sup>ル</sup>いの大きなこれで

「 あんた何者ーー？」

シモハルが叫んだ。

「 うむむむーー耳元で叫ぶなーーあと俺は正義の魔法使いだーー！」

「 正義の魔法使いね。へえーー」

ちよつと冷めた言葉に聞こえた。

「な、なんだよ」

「いや何にも……」

その後シモハルが笑つたような気がした雅一だつた。

「三階からどうするの？」

「そりや、二つからダイビングだ！」

「えええ————！」

「行くぞ」

「待つて待つて」

シモハルが足をバタバタし始める。キリは黙つたままだつた。  
後ろから爆発音が一気に聞こえて建物が崩れる音がした。

「さて、時間がないからいくぞー！」

「きやあああ————！」

「…つー。」

三人は三階から飛びビルは爆発により崩れて行つた。  
そして、雅一は一人を抱えたまま地面に着地して離す。

「「」んな思い」「度ど」「めん。」

「二人とも走るぞー。」

目視できる場所に装甲兵員輸送車一台止めてあり 一台が後ろの扉があいていた。

三人は走りだすと後ろから敵兵が迫ってきた。AK 47が放たれながら前進してきて RPG 7なども撃つてくれる。

「おーーーーい、三人とも早く!」

シノミが後ろ扉が開いていない方の装甲車の上のハッチから顔を出して手を振る。

「わかった!」

シノミは軽機関銃のRPKを出してきて援護射撃をする。

「あと少し」

後ろ扉まで10mをきる。  
後ろの敵も迫つてくる。

「三人とも早くー。」

アヤネが後ろ扉にいるその手にはAK 47を構えている。

「一人目ー。」

最初にキリが乗り込む。

「二人目！」

次に雅一が乗り込み

「はい、最後！」

最後にシモハルが乗るとほぼ同時に二両の装甲車が動き出す。

RPG 7を持つ敵を発見するとシモハルがM24を構えて引き金を引く

バ———ン

たつた一発で敵は倒れて上に向かってRPG 7を撃ちそれがビルに当たり倒壊して自分たちの方にきた。そして、2、30人が巻き込まれる。

「ナイス！シモハル」

雅一がシモハルに親指をぐつと伸ばして手を出すと。

「当然！だってわたしもん」

笑顔で言った。

一人も合流してようやくクランメンバーが全員そろって装甲車を走らせる。

「どうあるんだ？」

雅一が運転しているカノンに聞くと

「これから、武器弾薬の補充をしにゲットーに向かうわ。ちょうど  
川崎ゲットーに近いから。」

「ゲットー？？」

雅一が聞きなれない単語を耳にしてカノンに聞き返す。

「行けばわかるわよ」

カノンはそれだけ言つて運転に集中する。

クラン「月下の灯」は、一路川崎ゲットーに向かった。

夕日が見えた中、南下していく装甲兵員輸送車・BTR Dが途中で止まった。

「よし、ソシラ辺でいいかな？」

カノンが運転席から出てこへとシマツも運転席から出て行きながら話をすむ。

「ソシラへんに隠しておけばいいよな」

「ナリですね。一番ここと思こませう」

シマツは納得した顔になり運転席へと戻つて行く。カノンも同じように運転席へと戻つて行く。

「カノンへビうあるんだ?」

「これから車を置いて、ゲッターまで歩いてこへの

「ゲッターつてどこのあるんだ?」

雅一が周りの風景を見てきたのだが人が住んでこゐるよつたな配は一つもなかつた。

「行けばわかるわよ

わざわざからカノンは「」の言葉で事実を濁す。

「」「」に入れて

装甲兵員輸送車をがれきの下に入れれる。

「みんな降りて隠ペイ工作するわよ」

全員が下りてきて一両の装甲兵員輸送車を隠す。

「これでいいかな」

瓦礫の色と同化していく見分けがつかないぐらに完璧なものになつていた。

それをたつたの三十分でやつてのけたのだからさうに凄い。

「」「」から徒歩で行くわよ

「了解」

「はい」

「わかった」

「わかったよ」

「わかりましたわ」

「了解です」

「はいはい

「……うん

七人が歩き始める。

もちろん武器を携帯しながらの徒步だ。  
しかしその武器に問題があつたのだが

「何でハンドガンしか持つていかないんだ？もしもの時に大変だろ  
う」

「それは、今から行けばわかるわよ。アサルトライフルとか持つて  
いつたら大変なことになるから」

カノンが雅一の質問に答える。

アサルトライフルと言つのは、連射が出来て、中近距離向けの銃の  
ことを言つ。

「さつきからばぐらかしてばつかりだな」

「行けばわかると思します」

その愚痴にシマリが答える。

「そうかね？」

雅一はホルダーの中に入つてMP433・グラッチを触りながら進んでいった。

少し進むと住宅街からビルなどが乱立する都市部へと景色が変貌している。

「ここが川崎か。でも、人が住んでいる気配はないんだけど」

「みんなストップ」

カノンがみんなを止めて周りの様子を注意深く観察する。

「付いて来て」

動き始めるとみんなはそれについていく。

そして、川崎駅廃墟らしきものの中に入つて行くのだが、そこで不自然な出入口があった。

「大丈夫みたいね。走るわよ」

カノン以下クランメンバーが走つてついてくなが、雅一とヒメのみが状況を分かつていなかつた。

不自然な出入り口の中に入つて行くと、地下に続く道が出てくる。

「中に入つて」

駆け足で全員、中へと入つて行つた。

地下へと続く道をどんどん進んでいくと人が三人ぐらい通れる扉が見てくる。

そして、突然目のあたりにある小さな扉があいて

「MCDを出せ」

とても深みのある言葉を発する。

「わかつたわ。みんな、MCD貸して」

「ああわかつた」

雅一はMCDを渡す。

全員分を扉についていて青く光っている所に、それぞれふれていく。

「全員OKだ。ようこそ川崎ゲットーへ」

扉が徐々に開いて行つた。

扉をよく見てみると暑さが1メートルあまりあり、コンクリートでできていたためにすごい丈夫な造りとなつていて。

「すげーー」

雅一の目の前に広がつたのは、一本の幅が20メートルあたりある

所に人が所狭しと座つてしたり通りがかつてたりしていた。

「「」んなに人がいるのかよ……」

「違うわ。たぶん9割はNPCよ」

「あれがNPCなのかよ」

見てみると普通に動いている。

「ああなるほど。話さないんだ」

「正解。武器屋とかアイテム関連を擊つてるお店以外しゃべらないの。まずは休憩所を探さないと」

進んでいく。

周りには人がいてよけて通らないとつまく進めないくらいだ。

「あつた。あつた」

休憩所と書かれていたといふがあつた。

入つて行くと、普通のホテルのロビーと同じだった。タイル張りの床に観葉植物などが飾られていた。

「ずいぶん豪華な休憩所だな……」

雅一はポカンとした感じで周りを眺めている。

「みんな行くわよ」

ロビーに行っていたカノンが戻ってきて手にはカードを持っている。

「ああ、いくわよ」

壁の方に行きカードで触ると突然扉が出来る。

「すごいな」

「所詮、バーチャルだから何でもありなんでしょう」

そういうてカノンは中に入っていた。

みんなもそれに続いてく。

「なんじやこりや！」

中に入った光景は豊張りで人が2、30人ぐらいは入れる大広間的なところだった。

「ここに端っこに布団と座布団が人数分置いてある。

「こりは？」

「こんだけの人数をいれれて安いといったらここしかなかったの。」

「金取るのか?」

「もちろん、お金は銃などを売つたり。任務をクリアするともうすぐ仕組みになつてゐる。」

「なるほどな……」

それぞれ座布団を持つてきて輪になるようにして固まる。みんな荷物らしきものは何一つ持つてきていない。

「（）でみんなにいい知らせと、悪い知らせがあるけどどうぞ聞きたい？」

「それじゃあ、いい知らせからだな」

雅一が即答するとみんなも頷く。

「いい知らせは、神様はどうもやせこらへ。シャワーとお風呂のシステムが加わつてわよ。あと食事でできるよつて、設定されている。」

「やつた」

「嬉しい」

などと騒がしくなると、雅一はカノンに聞く。

「やついえば、何でシャワーや食事が必要なんだ?」

「それは、人間が習慣としているところでの行動がないと、意外に

だめなの。だからVRMMOは、必ず5時間で落ちるよつになつて  
るでしょ」

「確かにそうだな」

VRMMOは、長時間プレイによる、現実世界の体の変調をきたさ  
ないために5時間と決めている。

5時間過ぎると強制退場させられるのだ。

だから、いつもやるときは時間に気を付けていたのだ。

「でも、食べなくてもいいよな?」

実質昨日から何も食べていないことに気付くそれは、空腹にならな  
かつたことが一番大きかったのだ。

「そうね。GCT自体、別に食べる必要もないし、寝る必要もない。  
でも、人間の習慣はなかなか変える事が出来ないの。だから寝るし  
食べるの。でも、アイテムで体力回復系のレーションならあつたは  
ず。」

レーションはパックの中に入つていて進軍の際や作戦中などに簡単  
に食べれるものだ。

「次に悪い知らせは……」

「悪い知らせは…」

みんな静かになりカノンに耳を傾ける。

「米軍から任務が入つて、次は米軍基地がある館山まで行くことに  
なつたわ」

カノンがMCIDを指さしながら言った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3966y/>

---

VRMMOFPSで、チートハーレム物。（題名未定）

2011年11月27日08時48分発行